

## 工業技術研究所開設を振り返って

初代工業技術研究所長

塩田 俊雄



平成8年4月工学部呉キャンパスに近畿大学工業技術研究所が開設された経緯を振り返ってみたい。その前年の12月であったと思うが、当時の砂原広志工学部長から工業技術研究所を開設するにあたり、その研究所長にとの依頼を受けた。しかし、その開設趣旨をお伺いすると、人事を絡む工学部の戦略的な要素が強く、かつ、建屋・研究室・研究設備、予算は当面なく、研究所員は専任1名、各学科から2名程度兼務で配置、企業の技術相談、技術支援、共同研究、技術講演会などを行ってはどういう事であった。一度は、私はこの任に当たるには不適當であると辞退したが、引き受けざるを得ない結果となった。

その当時はバブル崩壊後の空洞化が進行中で、これまでのような欧米の基礎的研究をキャッチアップして発展してきたやり方では、日本の科学技術、産業発展はなく、日本の大学の中に埋もれている基礎的研究が企業に十分生かされていないという背景があった。したがって、大学と企業との産学共同研究の活性化の機運が高まっていたときで、中国地区でも国立大学で共同研究センターが開設され始めていた。

このような状況の中で、他大学に比べていち早く本工学部呉キャンパスに工業技術研究所が専任1名、兼任12名の所員で開設された。呉キャンパスに開設された理由は、当工学部は呉キャンパス（機械工学科、経営工学科）と新しい東広島キャンパス（工業化学科、建築学科、電子情報工学科、機械システム工学科）に分かれていたが、2学科しかなかった呉キャンパスの強化ということであった。開設の目的は、広島を中心とする瀬戸内広域産業圏の自動車、造船、鉄鋼、機械、半導体関連、化学工業、建築など地元産業界の研究・技術開発の支援と相談、共同研究、受託研究、技術講演会、研究情報の提供で、企業の技術ニーズ、大学のシーズの連携で大学が地域産業に貢献することとした。

工業技術研究所として当初取り組んだのは、研究所の活動方針と組織をパンフレットにして企業や官に情報発信、企業の皆さんへの研究室の見学会や研究公開、工学部専任教員の研究情報データベースの発刊で、各教員の専門分野、社会活動、研究課題、研究実績、企業との共同研究事例、共同研究可能分野、技術相談、特許などのデータベースを各企業に情報提供し、それなりの成果を得た。

平成13年8月に機械工学科と経営工学科の東広島キャンパスへの全面移転に伴い、工業技術研究所の拠点も東広島キャンパスとなり、共同研究、受託研究、研究者の受け入れ、寄附研究、技術相談、研究公開フォーラム、技術交流などその後引き継がれた廣安所長、深谷所長によって活発な活動がなされ大きく発展した。この度、研究設備、組織の充実した次世代基盤技術研究所が新設された事は大変喜ばしい事で、地域産業の活性化に繋がる研究拠点として活発な活動と技術社会への貢献を期待すると共に、地域の皆さんに親しまれ、愛される研究所として活躍される事を期待する。